道路

門脇松次郎

思いだすと、太平洋戦争で破れた国の住民として、一番先に私の目に映ったものは旧室蘭国道―札幌・室蘭間―がコンクリートの舗装道路になったことであった。この目的はなんであったのだろう。敗戦の混乱から抜けだすための食糧補給の輸送路か、進駐軍の占領政策上の交通と輸送路の必要性か、おそらく両者を兼ねた道路であったにちがいない。

舗装道路は、全て機械化によってアッという間にできあがってしまうのは驚異そのものであった。この進駐軍の道路建設機械が、爾後日本の道路工事を世界的水準にまでのしあげてしまった。この技術の栄光は、グランプリにも比する華かさを身につけてしまった。栄与の誇りがそのままに、民族的伝統の陰徳として昇華してほしかったが、残念ながらムキダシのものになってしまった。このことが、われわれの自然保護運動に大きくダメージを与える牙になるとは、誰が予想することができたであろうか。

道・路・途・径―ある地点から他の地点まで人や物が通行するための所―（新潮社・国語辞典）が異常なまでの国力に伴って、わが国経済の高度成長への飛躍的発展下にあっては、新しい道路づくりは高速道路という自動車のみの高速通行に限られた、通称ハイウエイを出現させてしまった。しかし、ここまでは一応、アメリカナイズされた道路としての変容に対し、なんと新しく、素晴らしい道路かと誰もが賛歎の声を放ったのである。

ところが、道路公団はグランプリ技術をおう歌して、車のスピードアップに順応し、「高速自動車国道」を全国的に建設することになった。本道も現在、札幌を中心として小樽、苫小牧方面が完成した。これがため、自然環境保全問題で物議をかもしだしているのが現状である。

＊

道路計画が図面上で線引きされると、上部組織からの強引な、しつようなまでの着工への動き、それほどに緊急性をもたねばならないものか、自然と人間との調和を崩壊してまでも不可欠なものなのか、疑問、反論が渦巻くのである。このような事態を直視し、本誌の今度の特集「道路問題」は、同じテーブルについての関係各機関の代表的論証が掲載されているだけに、刮目すべき貴重な、しかも示唆にとむ機宜をえたものであると思う。

（副会長）